

Title	ことばの研究・序説
Author(s)	布村, 政雄
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/38603
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏 名 ^{ぬの}布 ^{むら}村 ^{まさ}政 ^お雄

博士の専攻分野の名称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 1 0 8 5 6 号

学 位 授 与 年 月 日 平 成 5 年 6 月 22 日

学 位 授 与 の 要 件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当

学 位 論 文 名 ことばの研究・序説

論 文 審 査 委 員 (主査)
教 授 宮 島 達 夫(副査)
教 授 前 田 富 祺 助 教 授 仁 田 義 雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本語を素材として言語の意味と形式との関係を考察したものである。主眼は、この両者をきりはなすことなく、統一的に扱わなければならない、という点にあり、その線にそって、現代日本語のいくつかの具体的な事例が考察されている。形式を軽視した言語研究は根拠を失って主観的になり、意味（機能）を無視した形式主義は、現在の学校文法のように無内容なものになる。筆者のこのような立場は伝統的な言語学の基本と一致するものであるが、日本では、国文法が助詞・助動詞を独立の単語としたこともあって、かならずしも尊重されてこなかった。

筆者によれば、意味をになう単位としては、より基本的・分析的なものから、より具体的・総合的なものへと、単語・連語・文の3つの段階がある。

単語は文を構成する素材である。筆者の立場からすれば、学校文法で動詞+助動詞の結合とされる「行った」は動詞「行く」の過去形である。

連語は、「学校へ行く」「大きな本」「早く起きる」のように、2つ以上の単語が結合したものである。単語よりは具体的であるが、文とちがって陳述性をもたず、文を構成する意味単位である点は単語と同じである。

文は、特定の言語活動のなかであられる具体的な単位であり、断定・命令・疑問など、話し手の立場からする陳述をもつ。

したがって、本論文の構成も、もっとも基礎的な単語の意味と形式についての考察から出発して、連語の意味と形式、文の意味と形式、と順に高次の単位におよぶ。

本論文は、A5判321ページ、400字づめ換算約820枚の分量をもつ。以下、各章の内容を紹介する。

最初は単語についてである。単語の意味と形式、というとき、まず問題にすべきなのは、単語の語彙的な意味である。

「語彙的な意味のあり方」の章は、動詞「みる」を例にして、意味の分割・分類が恣意的になるのを防ぐために、いちいちの意味が、どのような文法的な条件のもとで成立し、存在しているか、を論じたものである。単語の基本には、形態や連語にしばられていない、<自由な意味>が存在し、そこから<構造にしばられた意味>や<機能にしば

られた意味>が派生する、というのが本章の結論である。たとえば、「山をみる」という視覚活動は基本的な意味であり、「シェクスピアに英国中世の信仰をみる」という発見の意味は「～に～をみる」という構造にしばられた意味である。本章は、日本語についての代表的な論文を集録した『日本の言語学』に採録されている。

「語彙的なものと文法的なもの」の章は、単語が語彙的なものと文法的なものとの有機的な統一物として存在する、ということ強調したものである。まるごとの現実を、断片に分解して単語に表現し、それを文のなかに再統合するのだから、語彙的な側面と文法的な側面とは、切りはなせない関係にある。国文法では、「ゆび」という名詞は名づけだけの無機能な単語で、「ゆびで」の「で」という格助詞が機能をになう、とすることがあるが、筆者によれば、名詞「ゆび」が文法的機能をもつからこそ、格助詞「で」がその機能を表現できるのである。

「言語における形式」の章では単語の「文法的形式」について述べている。<形式>ということばを、せまい意味での語形と解釈すると、副詞のように語形変化をしない単語は、形式がないことになる。しかし、単語は文のなかで他の単語との結合において存在し、どのような単語とむすびつくか、という構文論的な性質が、まさに形式である。語順・きれつづきなどの手段も、単語にとっての文法的な形式としてとらえるべきである。動詞の終止形と連体形も、単なる形態論的な表現手段がおなじでも、ちがう形式である。

「単語をめぐって」の章は、日本語の連語に関する、筆者の具体的な研究のなかから得られた結論である。単語は単に語彙的なものでも、文法的なものでもなく、その両者の総合である。そして、ぎりぎりのところでは、単語における語彙的なものと文法的なものとは、ひとつに溶けあって、<カテゴリカルな意味>を形成している。動詞についていえば、自動他動性・再帰性・相互性・意志性などである。これらは、単語の結合能力による分類にともなう、語彙的意味の共通性の側面である。

「連用、終止、連体…」の章では、江戸時代の国学の遺産である、国文法における活用の整理を手がかりにして、語形と機能の関係を論じている。動詞の終止形で、ほかの語形よりもムードの体系が複雑であることから分かるように、単語の構文的機能は形態論的な特質を規定する。単語の文法的な意味には、現実の世界における客体的な結びつきを反映する構文論的な関係と、文の对象的な内容を現実の世界に結びつける陳述的な関係とが含まれる。これに応じて、文は構文・意味的な構造と、構文・機能的な構造とをもつ。<主体・動作・空間>などは前者の、<主語・述語・対象語>などは後者の分析に使用される用語である。

つぎに、連語における意味と形式の関係にうつる。連語論は、文法論のなかで、筆者が中心になって開拓した分野である。今回は、主論文としての本論文に対する副論文として、「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」ほか3編（『日本語文法・連語論（資料編）』に収録）を提出した。連語論における筆者の具体的な研究成果については、これらの論文を参照していただきたいが、従来抽象的に格助詞「ヲ」の意味、などとしてあつかわれてきたものを、精密に分類・規定したものである。たとえば、「リボンをむすぶ」では動作は対象の生産を意味し、「かみにリボンをむすぶ」では第2の対象への付着・設置を意味する。どのような型の連語がみとめられ、どのような動詞がこれらの型をつくるのか、という記述が、詳細になされている。

「言語の単位としての連語」の章は、連語論についての理論的な決算である。「むすぶ」という動詞が「リボンをむすぶ」「かみにリボンをむすぶ」という2つの型の連語をつくるのは、この単語の語彙的意味によって、複数の結合能力をもつからである。どんな単語とどんな単語とがシンタグマティックに結合してどのような型をつくるかが、連語論の重要な課題である。これらの結合の型は相互に対立して、全体的な連語の、パラディグマティックな構造をつくる。その全体的な構造の解明も、もう1つの課題である。筆者は、とくに、連語の構造的なタイプの分類が被修飾部（かざられ）になる単語の品詞によるべきことを論じた。品詞のなかには、単語のもつ構文的な結合能力が一般化されて定着しているからである。単語の結合能力によって結びついた連語は、高次の名づけ的な単位となって、文の要素をなす。筆者の連語についての基本的な考えは、以後の研究にとって、重要な意味をもつものである。

最後に、文における意味と形式の関係である。

「アスペクトの研究をめぐって」の章は、本論文のなかでも特に重要な研究例である。日本語のアスペクトの研究は、「ている」の用法を基準とする金田一春彦氏の動詞4分説によって、ひとつの画期をむかえ、以後、これにもと

づいて現象の記述はすすんできたが、アスペクトの本質を規定するには不十分だった。ここでは、いわゆるスル形を完成相、シテイル形を継続相とし、前者の本質を<動作を分割できない、まるごとのかたち>で提出することにある、とした。そして、筆者に近い立場にある、鈴木重幸・高橋太郎・吉川武時らの見解の検討を通じて、自説をくわしく展開した。アスペクチュアルな意味のちがいを規定する動詞のタイプとしては、動作の長さ基準をおく<瞬間動詞：継続動詞>という規定が、金田一以来一般化していたが、筆者は、これをあらため、動作の質によって動作動詞と変化動詞とに分類した。

筆者は、従来の国文法が助詞・助動詞を独立の単語とすることで文法的な形式を語彙の意味から切りはなし、無内容なものにした、とする。「格助詞―渡辺実君の構文論をめぐる」の章は、代表的な〔国文法的〕文法学者である渡辺氏の方法に関して、この点を批判したものである。渡辺氏によれば、体言は素材表示の機能のみをもち、関係構成の機能はもっぱら格助詞に託される。これは、体言が構文的には無機能であり、関係ぬきの実体、実体ぬきの関係をあらわす<単語>が存在する、というにひとしい。しかし、事実上、関係を構成するのは、まさしく実体としての体言なのであって、格助詞はその表現手段にすぎない。従来格助詞の意味とされたものは、名詞と動詞（形容詞）の関係として、つまり連語論の立場から、記述されなければならない。

「意味と機能」の章では、単語の語彙の意味と文法的意味をむすぶ、中間的なものとして、カテゴリー的な意味をとりあげた。また、単語の文法的な意味が、文のなかではたす機能によって規定されることを論じた。たとえば、動詞のもつムードの体系は、文中におけるその動詞の機能が、終止であるか連体であるかによって、あきらかに制約されている。部分は全体によって規定される。文の基本的な機能は伝達にあり、そこから、それぞれの単語のはたすべき機能がきまってくる。

「構文論の再出発―エフ・ダネシュの見解から」の章は、プラーグ学派の文法学者ダネシュの‘A three-level approach to syntax’をとりあげて、構文論の基本概念を論じたものである。文の構文論的な構造が意味構造と機能構造とからなりたっていることは、ダネシュもみとめる。しかし、かれは、これらを切りはなして、それぞれの自足的な世界をなしている、とする。だが、たとえば主語が機能としてテーマでありうるのは、それが意味として動作や状態の主体であるからであり、述語についても同様である。要するに、ある成分の意味的な特徴と機能的な特徴とは、必然的に結びついているのであって、これを無視すると、要素間の関係が無内容なものになる。

「言語の体系性」の章は、術語の規定をめざしたものである。言語学者は、よく「体系」「構造」「要素」などの用語をつかうが、これらを、体系論一般にてらして、厳密に規定しておく必要がある。言語においては、文のようにシンタグマティックな関係の上になりたつ体系と、語彙体系のようにパラディグマティックな関係の上になりたつ体系と、2種類の体系を考慮しておかなければならない。体系の要素であるのは、かならずしも物ではなく、関係でもありうる。言語の場合でいえば、単語以外に、構文的な結びつきも要素となって、体系をつくっている。単語は文から相対的に切りはなされ、それが文を構成するが、文の構造はぎゅくに単語を組織化し、その性質に文法的性質をやきつける。

「文のこと」の章で述べていることは、まず、文の対象的な内容が現実世界の出来事の反映だということである。つまり、それは客体のリアリティーから主体のリアリティーに移行しており、その際、その modus（存在のし方）に応じて、<ものがたり文、まちのぞみ文、さそいかげ文>などの区別が生ずる。ところで、文における現実の反映は、<私>（話し手）の積極的な活動によってなりたつただから、modus は、<私>の立場からする、現実の世界の出来事と対象的な内容としての出来事との関係のし方である。

なお、本論文には、筆者の初期の小論文5編が掲載されているので、簡単に紹介する。

「音韻についての覚書」は、音韻を仮説的単位とする服部四郎氏の説を批判し、これを1つの言語の音声における本質的な単位として規定する。

「E・サピアの音韻論について」は、音韻＝仮説という説に対して、音韻の客観的実在性をみとめたものとしてサピアを再評価する。

「日本語動詞の語幹について」では、動詞「書く」を kaka-nai と分析する考えを批判し、kak-anai とすべきだと

する。

「日本語における主語」は、「は」主語と「が」主語との対立が動詞の意味からして1義的にとらえられる、という立場を否定し、(1) 主題と指定／(2) 主題とりたてと指定とりたて／(3) 主題強調と指定強調／(4) もっぱら主語性を表現しているゼロの場合 の4つに分類した。通達的な構造の観点から、すべての文がテーマ・レーマにわかれる、とはいえないからである。

『文法教育の革新』については、三上章氏の著書の書評であり、特に三上氏の主語否定論を批判している。

論文審査の結果の要旨

日本語の研究は、江戸時代の国学以来、独自の発達をとげてきた。これに対して、外国において開発された言語一般の研究方法によって、他の諸言語と同列において記述しよう、という試みも、くりかえされてきた。第2次大戦後においても、構造言語学と生成文法という2つの波を指摘することができる。

本論文の基本的立場は、一般言語学の方法によって国語学の成果を再検討する、という点では、これらの動きと一致するが、構造言語学や生成文法にくらべて、より伝統的な言語研究の立場にたつものである。すなわち、意味を無視または軽視した構造言語学の形式主義に対しては、言語における形式と意味とを切り離すことなく、その総合としてとらえよう、とする。また、話し手の直感を重視して、ある表現が可能かどうかを主観的な判断にもとめる生成文法のあり方に対しては、用例を重視してそこから客観的な結論をみちびく、という態度をとる。それは、一見したところ、はなやかさに欠けるようではあるが、きわめて着実な方法であって、具体的な現象の解明にあたって、ゆるぎない基礎をあたえてきた。

本論文の範囲での布村氏の最大の貢献は<文法的カテゴリー>の概念を日本語研究のなかに定着させたことであろう。伝統的な国文法は、文法的なものの担い手として、もっぱら助詞・助動詞を念頭においてきた。それは、日本語とくに古代日本語の現実に、かなり適合する面があって、すぐれた成果をうんできたのであるが、現代日本語の助詞・助動詞を単語としてとらえることは、どうみても一般言語学的な常識に反するし、限界がある。あきらかな例は、テンスやアスペクトであって、日本語ではテンスについては「一た」という過去のマーカー、アスペクトについては「一ている」という完成相のマーカーがあるだけで、これに対立する現在や未完成相はゼロ形式によって表現される。このため、国文法にはテンスやアスペクトというカテゴリーの概念がきわめてうすく、具体的な記述もおくれている。布村氏は、これらのカテゴリーを正面から研究対象とすることによって、研究の水準を一気にひきあげたのであって、たとえば本論文のアスペクトに関する部分は、以後、ほとんどのアスペクト研究者の出発すべき共有財産になった、といってよい。布村氏の意見に賛成しない人にとっても、無視することが許されない必読の参考文献になっている。それは、現代日本語の範囲にとどまらず、方言や古代語、さらには日本人の朝鮮語研究者を通じて、朝鮮語のアスペクト研究にまで、影響をおよぼしつつある。

形態論的カテゴリーをこえて、連語論にはいると、これは、まさに布村氏によって開拓された分野であるので、そこで展開された、<かざり(修飾部)~かざられ(被修飾部)>の対立と<かざられ>の優位性、連語の体系、連語におけるカテゴリー的意味などの理論は、布村氏の独壇場といってよい。学問のある分野の研究をたかい水準にすすめるだけでなく、ある分野を切り開くことは、抜群の力量を必要とするが、布村氏は連語論においてこれを実行したのである。

さらに、本論文の後半には、布村氏が現在精力的に研究しつつある、文論のカテゴリーについての基本的な概念が扱われている。これも、また、日本語文法研究への重要な寄与である。

以上、本論文の積極的な価値について述べてきたが、文法の各方面にわたる問題を扱っているだけに、細部については、今後の展開にまつべき部分がある。たとえば、アスペクトについては基本的な「~する/~している」についての考察に集中している半面、周辺の「~てある、~てしまう」や複合動詞型の「~しはじめる、~しおわる」など

をどう位置づけるか、ということがある。また、連語のなかにはガ格（主格）の名詞と動詞・形容詞との結合を含めないが、それでいいのか、という点も十分説明されていない。さらに、独創的な理論家に往々見られることであるが、自説の提示にあたって、他の諸説の評価・批判が詳しくされていないので、いささか独断的な印象をあたえる箇所もある。そのときどきに応じて書かれたものであるので、内容に若干の重複もみられる。

しかし、このような欠点は、本論文の学問的な価値を、本質において低めるものではない。本論文が提示した理論は、日本語研究の世界に、年とともに重要な影響をおよぼし、定説的なものになりつつある。本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するに十分な価値を有するものと認定するものである。